

---

# だから彼女はついてくる！

今宮いたる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

だから彼女はついてくる！

### 【Zマーク】

Z0603X

### 【作者名】

今宮いたる

### 【あらすじ】

神村イツキは、記憶喪失の少女『雪城鈴』に付きまとわれている。  
現代の常識が殆ど吹っ飛んでしまっている彼女と、それに振り回さ  
れる彼の日常を描く。

## これが一人の日常

「あつ」

夕方、コンビニの店内に不吉な音が響く。

開封された、いや開封されてしまつた袋からは枯葉のよつたものが何枚も舞い落ちてゐる。

ポテトチップスだ。

「うわああ！ 何やつてんだよお！」

ほんの一瞬、神村イツキが彼女から田を離した瞬間の惨事。彼は狼狽してしまつ。当然だ。

「開いちやつた……」

自分でも良くないとしたといつ自覚があるのでどうか、雪城鈴は自らの手で開封してしまつたソレを両手に持ち、申し訳なさそうにイツキに視線を送る。

「ああ、もう！ 貸して！」

急いで走り寄り、少し乱暴氣味に彼女の両手からポテトチップスの袋を引っ張がす。

「何にも触れずに待つて」と言つと、彼はレジの方へ駆けてゆく。レジにいるアルバイトであるつ店員に頭を下げて平謝りをする彼の姿を見ながら、彼女は頭を搔く。いけないことをしたといつ自覚はあるのだ。ただ、その判断基準は彼女にとつてはとても曖昧なもの。

「どれが正しくてどれが正しくないのか。  
何が普通であつて何が普通ではないのか。

彼女にとつて全ては未知の世界。

「『じめんね？ イツキ』

帰り道、イツキの顔を覗き込む鈴。真珠のよつて黒く長い髪の毛と大きな目が特徴的だ。

「……ああ、いいよ」

少し疲れた様子で応える。

「ああいう所では開けちゃダメなんだね。次からは気をつけろ」「自分の胸のあたりで両手を結びながら、心に刻むように唱える。

「……そもそも、なんでポテチの袋なんか持つてたんだ？」

「何かなって思って」

「そんで、確かめてたら開いた、と」

「そう」

「好奇心旺盛か、お前は」

「だ、だからあ！ もうしないよ！ 触らないもん！」

反省（弁解？）する彼女の姿はもう何度見ただろうか。

「いや、注意するの忘れてたし、俺も悪かった」

「はあ。この前行ったお店では、開けるどじろか食べる」とだつてできたのに、不思議だね……。判断が難しくつて参つむやつよ

「あれは試食つていつて、食べ物の宣伝だ」

「ふーん……。じゃあもつといつぱい食べとけば良かつた」「やめろよなあ、みつともない」

イツキは年頃の女の子がスーパーの試食コーナーにがつついでいる姿を想像しながら述べる。

「でも、良かつた！」

「？ 何が？」

鈴の顔が少しだけほころぶ。

「だつて、欲しかったんでしょう？ ソレ。なら丁度良かつたじゃん！」

イツキの持つコンビニの手提げビニール袋を指して話す。中には先ほど開封済みのポテトチップスが入っている。

「」

「欲しかったんじゃないよ！ 買い取られたの！ 商品にならないから！」

「ええ！ そうなの！？」

「そうなんですよ、鈴さん」

本当に驚いた表情をしている鈴に彼も怒る気が無くなってしまつ。その代わりに深い嘆息が漏れる。

家に着く頃には、彼はすっかり疲れきつてしまつていた。近くのコンビニ行つただけだというのに、この疲れ様は何なのだと聞いたくなる。それに対して鈴はまだまだ元気だ。いつものようにテレビの前にちよこんと座つて、チャンネルをじっくり回している。

「明日だよね？」

天気予報が明日は晴れだの曇だのと言つている。その前に座つている鈴はテレビから視線を外してイツキに移行しつつ話しかける。

「学校か？ そうだな」

「イツキと同じ学校で、しかも同じクラス！ 改めて、宜しくね！」

満面の笑みだ。

彼女、雪城鈴は明日から『おそらく』高校2年生になる転校生。彼女が転校して在籍する予定のクラスは神村イツキと同じ。そして学校は明日の4月1日から始まる。

「ああ」

（宜しくって言われてもなあ……）

晩ご飯の支度をしながら彼女が話に耳を傾ける。

明日が4月1日ということは、今日は3月31日。彼と彼女が接点を持つのは明日からのはずである。

神村イツキが在校生で、雪城鈴が転校生。

そういう関係になるはずだ。

だが、彼女は2週間も前から神村イツキを見つけて付きまとつてゐる。そう表現してしまつと鈴には不本意かもしれないが、現にそれ以外にこの状態を表す言葉が見当たらないので仕方がない。

「……鈴。本当に鈴は転校生で、明日俺と同じクラスになるんだな

？」

「そうだよ？」

「じゃあ、一度いい。鈴、俺から離れるんじゃないぞ」

「そーんなこと言われなくともわかってるよお

鈴が嬉しそうにイツキに飛びついてくる。だがイツキは「しまつた！」という表情をしてそれを回避して跳ね除ける。

「そういう意味じゃなくて！」

「じゃあ、どういう意味で？」

「お前、記憶ないんだろ？」

「ない。ほとんど覚えてない」

「だから。また変なこと為出かすかもしれないだろ？」

エプロン姿で人参を切りながら、居間に追い返した鈴に話す。彼は県外の出身者なので、一人暮らしだ。主に両親からの仕送りで生活している彼は、自分の生活をすることで精一杯の毎日を送っていた。

そこにヒョコッと現れたのがこの雪城鈴。

「しないよお」

まさかあ、と言づような表情で彼の方を見る鈴。

「いや、する。初めて会った日、ずっと俺を尾行して家までついてきたお前なら、十分にありえる。現に今日もひとつやらかしたしな」

「欲しくもない商品を買ったこと？」

「違う！ お前がホテチを店内でぶつ放したこと！」

この調子で明日から大丈夫なのだろうかと不安になる。いや不安なんものでは到底済まない。この不安という表現は、『ヤバい』という言葉に置き換えられる。それも、テスト前に勉強していないからヤバい、とか、今日体育の授業があるので体操着を忘れたからヤバい、とか、そういう類のものではない。それはもう、電車が到着する瞬間にホームに転落したからヤバい、とか、ハイキングしていたら滑落した上に目の前に5匹もクマがいるからヤバい、とか、そ

んな感じのヤバさだ。彼が伝えたいのは、とにかく安穏としている  
れる状況ではないということ。

「だからあつ、ソレは反省してるよお……」

肩をすくめる鈴。

鈴にはどこか保護欲を煽る雰囲気がある。小さな背丈に、幼い女  
の子を思わせる顔立ち。肩幅も狭い。大きな人形を抱えさせたら、  
ほとんど隠れてしまいそうなくらいだ。その姿を見るたびに彼は「  
うつ……」口をつぐんでしまう。これ以上彼女を責めることにどう  
か罪悪感を覚えてしまうのだ。

そして記憶喪失故にこの現代社会における断片的な知識しか持つ  
合わせていない。ましてや常識なんてあつたものでもない。

一般常識がないことも、記憶喪失であることも、この社会で生き  
て行く上では致命的なことだ。だがイツキにはそれをも上回る最大  
の関心」と兼疑問点があつた。

それが「もう一度聞くけど

」「

「なんでお前は俺から離れないんだ?」

大きく息を吸つた後に投げかけるこの質問。もう何度しただろつ  
か。

だが、鈴はその間に決まって

「よくわかんない。でも、イツキから離れちゃいけないの」  
と答えるだけ。もちろん今回も例外ではなくお決まりのコレで返  
される。まるでテニスの壁打ち練習かのようだ。彼には鈴の真意が  
掴めなかつた。当の本人もその言葉の意味を深く察していないう  
であるから、答えのいとぐちさえ見いだせない。

今日の晩御飯は焼き魚と野菜炒めに白米。それらを盆に乗せて鈴  
の居る居間に運ぶ。イツキは作りたての料理を居間のちゃぶ台にひ  
とつずつ丁寧に置く。

「わあ」と田を輝かせる鎧。そのまま夢中だつたテレビはやつちのけだ。

「ねえ、もう食べてもいい?」

「ちょっと待ちなさい。手で食つ氣かお前は手で食べてるといもあるんだよ?」

「確かにあるケドな、それは外国の話だ。ていつか、なんでそんなこと知つてるんだ?」

「テレビで言つてた」

イツキは会話を続けながら一人分の箸とコップを持つてくれる。続けて冷蔵庫からお茶の入つたピッチャーやお皿まで運び、やつとじ飯の時間になつた。

明日はといつ始業式。

## 木炭と血口紹介と自動ドア

雀のさえずりが聞こえる。

日差しが嫌というほど彼を照りつける。

「朝だよーー！」

鈴が思い切りカーテンをオープンしたのだ。  
相変わらず朝っぱらから元気なヤツだなあ、と彼は眠い目をこす  
りながら肌蹴た布団を再びかぶる。

「あ！」

彼女が近付いてくる足音。

彼の周囲の世界は再び強制的に明るくなつた。急いで布団を探す  
も鈴に後方へ吹っ飛ばされているので、偶然が味方してくれる以外  
に手探りでは探し当てる術がない。

「あーさーーー！」

また元気な声が聞こえる。

「つるさいー……」

イツキは小さな声で反撃に出る。

「朝だよイツキ！ 朝！ あーさーー！」

「わかつた、起きる。起きるから大きな声を出すなって。近所迷惑  
だろお？」

眠そうな声だ。

「アーサー、アーサーって。なんかの王かお前は……」と、ふと浮  
かんだ下らない冗談を鈴にふつかけてみるも、田をこすつていた手  
をどけると彼女は彼の前にはもういなかつた。  
「何？ 呼んだー？」

台所の方から鈴の声。

「いや、何にも……」

少し恥ずかしそうに制服へと着替えを始めた。朝から騒ぎ立て  
ていた鈴はもう既に着替え終わっている。彼女に遅れること数分、

制服に着替えたイツキは眠たそうなふらふらとした足取りで台所へと向かう。

「はい、『飯』！」

急に彼の目の前に、鈴が『『飯』』と称するものがズイと差し出される。

「……木炭？」

「違うよ、パンだよ」

「パンかよ！ 炭化してる！」

「うーん、どうも上手く焼けなかつたみたいでねー」

『いやー、参った』とでも言いたそうな表情。台所のテーブルの上はパン粉だらけ。袋から取り出す作業に手間取つたと見える。

「でもむ、こうこうのつて『見た目じゃない』ってよく言つんでしょ？」

「誰が言つて……」

「テレビ」

彼女の知識は大体がテレビかイツキ。彼が与えていない知識は全てテレビであるから、イツキが『誰から聞いた』と鈴に質問してもその答えはテレビに決まっているのだ。彼もそのことは知つているのだが、ついつい反射的に聞いてしまう。

「だからさ、見た目じゃないんだつて！ 食べもせずによく言つよー」

「いやいや、今回ばかりは見た目が重要だろー。見るからに食いつかない色してるし！」

「えー、せっかく作ったのにい

「『作つた』つて、焼いただけだろ？」

皿の前に差し出した皿をテーブルに置きながら、鈴は少し残念そうな表情をする。

「まさか、お前もその消し炭を食つたのか？」

「私は上手く焼けた方を食べた」

「おい！ 失敗作の自覚あるんじゃねえか！ 食わそつとするなよ

な、そんなモン……」

イツキは文句を垂らしながら新しいパンを袋の中から取り出し、オーブントースターに放り込む。

「パンは1分くらいで十分。覚えていて」

「うん、私もさつきそれを知った。10分焼いたら真っ黒になつた

んだ」

「そ、そうか……」

10分も焼かれるなんて、何と不運なパンだろうか。冷凍されているパンでも10分間も焼いたらコレと同じ様な暗黒の姿を披露するだろう。しかもよくよく改めて見てみると木炭と言つより、完全に炭だ。このまま『炭』としてパッケージされて商品棚に陳列されても氣付かないほどに真っ黒。それにチラと視線を送りつつさつさと食事を済ませたイツキは、もう既に玄関で待っていた鈴と一緒に学校へ出かけた。ガラス越しではない朝の日差しがまた一段と眩しい。

何度も車に轢かれそうになつただろうか。

教室に到着して自分の席に座る彼は、始業式もまだ始まつていないのでもうぐつたりだ。

(道路で鈴が走りまわるから……)

鈴は車の危険性を把握している。『車には注意しないといけない』ということもイツキから幾度と無く諭されてきたので、少なくともその分別はあるはずだ。だが、圧倒的な経験不足。社会的な経験がまったくもつて足りていない。彼女が記憶を無くす前はあつた違う『常識』が、今は欠片ほどしか残っていない。毎日が学習だ。例

えば車が曲がり角や死角から飛び出してくるかもしれないとか、急に止まることができないとか、彼女も頭では分かっているはずだ。見ればわかることばかりだし、理解するには容易いこと。しかしその危険性を、身を持つて知つているわけではない。だからこそその彼女の無鉄砲且つ大胆な行動が、イツキには心配で心配で仕方なかつた。

（あいつ、今頃一人で大丈夫だろうな……？　変なことしてないだろうな……？）

イツキの脳裏に職員室前で別れた鈴の顔がよぎる。確か満面の笑みで、別れ際にこっちに向かつて手を振つていた。彼女が何か変な行動でも起こすのではないかと、イツキの内心はそれはもうハラハラものであつたのだが、そんなことを微塵も察していなかつたような無邪気なあの表情がまた彼の不安を倍増させる。

始業式は滞り無く執り行われた。校長先生の長つたらしい話も、よくわからない賞状の授与も、来賓の紹介も、彼らはどうでもいい話。全く頭になんて入つていない。特に今の神村イツキには、そんな話の一片も入る余地など残されていなかつた。なぜならこの始業式が終われば次は教室でのホームルーム。普段なら授業ではない、半分歓談の時間となるこの授業。生徒たちにとつては何のプレッシャーもかからない至福の時となるはずだ。それが今回ばかりは彼の最大の試練。おそらくこのホームルームの時間に

「じゃあ転校生の紹介の時間といこうか！」

教室が一気に沸き立つ。先生が「転校生は女子」だと告げると、より一層大きな歓声に包まれる。

「イツキ、お前ももつと喜べよー 女子だつてよー」

「あ、ああ……」

沸き立つ男子生徒にも、力のない笑顔で返す。これからのかの苦労を考えると両肩に重荷を乗せられるような思いだ。

「それじゃ、雪城。入ってきて」

先生が扉の向こうに立つ転校生、雪城鈴の入室を促す。

「マジかよ……」

小さな声でイツキがつぶやいた。彼女の言っていたことが本当だつたからだ。根拠もなく言い張る鈴に、完全には信じきれていない気持ちがどこかにあつた彼の思いは、また確信へと一步駒を進める。彼がそんな思索を巡らせている間に、教室がざわざわしだした。教室の扉は引き戸形式の一般的なもの。その扉の磨りガラスの向こう側に影が見える。雪城鈴は確かにその向こうにいる。だが扉は開かない。

「…………あれ？」

鈴は教室の扉の前でつつ立つたまま。何か不思議なものを見るかのように扉を眺めているだけ。

「？ 雪城？」

訝し気な表情をする先生と生徒達。

（何してんだよ、早く入つて来いつて！）

念波でも出るのではないかといふほどに強いメッセージを『鈴に届け！』と祈るも、そんなことを知る由もない当の本人は脳内ハテナマークで呆然と立つているだけ。しひれを切らした先生が扉をガラッと開けると、鈴は「うわっ！」と小さく声を出して驚いた。

「何をしているんだ？ 早く入りなさい」

「あは、はい。自動ドアじゃないんですね」

鈴はどうやらコンビニなどの自動ドアと勘違いしていたらしい。思えば彼女はイツキとコンビニくらいしか行動を共にしたことがない。記憶のない彼女が『引き戸形式の扉は全部自動だ』と勘違いしていくても不思議ではない……？

これはイツキには強烈な先制パンチであった。

（ぐつ……！ 初端からこんなインパクトの強いことやりやがつてえ……！）

先生はこの鈴の返答に失笑。彼女なりの、何かの冗談だと捉えたのだろうか。

鈴は教卓の前に移動する。そして白のチョークを手に取り、黒板に大きく自分の名前を書いた。

「札幌雪祭りの『雪』にノイシュヴァンシュタイン城の『城』、鈴鹿サー・キット・フラワー・ガーデンホテルの『鈴』で『ゆきしろすず』と言います。よろしくお願ひします」

ぽかんとする先生。

（自己紹介、斬新過ぎるだろ！　ただでさえ言動が目立つのに、これ以上注目をあびるような真似やめてくれよ……）

イツキの精神は初端から大きく削られる。

だが生徒たちの反応は上々。不思議な女の子だなと思われた程度に済んだようだ。さすが雪城鈴の美少女補正。普通ならば『変人だ』『近寄ったら色々な意味でケガするかも……』と思われるところを逆に自らのアドバンテージに変えてしまう。たとえ本人にその気が無くとも『これもこの子の魅力なんだ！』と思わせてしまう。逆の立場なら世の中の不条理を痛感するところだ。実際は彼らの第一印象のままの人間なのであるが……。だが、まさか彼女が記憶喪失者で、しかも神村イツキと一緒に住んでいるなどということは、一瞬たりとも、微塵も思いもしないだろう。もちろんこれは内緒だ。広がれば騒ぎになる。記憶喪失の人なんてこの世は広しといえどもそうそう居てたまるものではない。バレると騒ぎになるのは容易に想像できる。だからイツキも鈴に事前に口止めをしたのだ。鈴はそれに頷いてくれたものの、それだけではこの不安感は解消するものではない。

「いや、初めて知ったよ」

ホームルームも終わり帰路につくイツキと鈴。

「何が？」

「教室のドアって、勝手に開かないんだね」

彼女はイツキと出会つてからの記憶しかない。それ以前の記憶は断片的にしか残つていない。更にイツキが鈴を連れて出かけた場所といえばコンビニくらい。コンビニのドアは勝手に開く。御存知の通り自動ドアだ。鈴はそれしか見たことがない。やはり鈴の中では『扉』勝手に開く』という図式が出来上がつてしまつていたのだ。

「あのなあ、俺の家のドアは勝手に開くか？」

「開かない」

「それと同じ。ドアってのは普通は人が開けないと開かないんだよ。コンビニとか、そういう店とかではサービスで自動なだけで普通は自動ドアじゃないんだ。それに、家のドアが自動ドアだったら防犯上宜しくないだろ？」

「それは大丈夫だよ！」

彼女のつぶらな眼差しがイツキに向けられる。

「？ なんでよ？」

「イツキは強いから！ もし悪い人が入つてきても、やつつけちゃうんだから！」

鈴は笑顔でそう言い切つた。

彼にはまさに青天の霹靂だった。

人生で一度も言われたことのない言葉、『強い』。

彼は全く強くない。ケンカだってすぐに負ける。いや、負ける前に降参する。スポーツは人並み。何か突出してできるというわけでもない。

「はあ、別に強くないぞ？ おれ」

鈴の確証のない適当な妄言だと彼は判断する。

「強いよ！」

だがそれは鈴の強い語調で否定された。

「え？」

「強いんだよ、イツキは！ 私、何にも覚えてないけど、イツキが

強いことは間違いない！」

いつもより強く主張を続ける鈴。ついつい気圧されてしまう。

「そんな根拠もなく強い強いつて言われてもなあ……。ビリがビリ  
強いんだ?」

「そうだね、銃を持った強盗に素手で応戦するくらい強い」  
場面を想像するまでもなく、敗退濃厚なシチュエーションが容易  
に想起される。

「強すぎるだろ! 何かの達人かよ! ていつかその『強い』の意  
味、違うくねえか! ?」

信憑性など元々無い鈴がこのようなトーンでモ例え話を披露しても  
説得性は皆無。

なので

「……ああ、もうわかったよ。何がどう強いのかよく分かんねえけ  
ど、鈴の期待する程度には強くなるよつに頑張るよ」  
と、イツキは華麗に流すことにした。

「のまるつきつ信じていないイツキの口ぶりに、鈴は口を尖らせ  
る。

「……信じてないでしょ」

「いやいや、信じてますよー」

明らかな棒読みに、鈴はプイとそつぽんを向く。

雪城鈴が突然突拍子もないことを言つのは日常茶飯事。  
イツキもそろそろ慣れてくる頃だ。

「イツキ」

「うん？」

昼食を終えた休日の昼過ぎ。

鈴はいつもと同じく食事に入るよつてテレビに繋り付けており、イツキは台所で食器の後片付けをしてくる。

「人間つかさ、いつどんなことが起こるか分かつたもんじやないよね」

「……？ あ、ああ。やうだな」

急に畏まつて話す鈴に違和感を覚える。しかし、特に何の反応も示さず台所で自分のすべき仕事をする。そもそも当の本人がその『いつどんなこと』に巻き込まれて記憶喪失になつてしまつているのだから世話もない。

「……」

それつきり、またテレビ集中モードに突入する鈴。突然変なことを言つるのは鈴のいつもの日常だ。だがそれも記憶回復と学習に繋がる。それを分かつてゐるイツキはこれ以上介入する考えを意識的に排除する。

居間から「ふはあ～」といつ氣の抜けた声が漏れ聞こえてきた。

「ねえ、イツキ、イツキ」

「んー？」

返事は皿とスポンジを持つ手を動かしながら。

「イツキの遺産はどれくらいあるの？」

「！？」

洗つていた皿を滑つて落としそうになつてしまつ。

「はあ！？」

「『はあ！？（モノマネ）』じゃなくて、あるの？ 遺産」

真似されたことに少しイラッとするも、いきなり出た『遺産』と

いう言葉にたじろぐ感情が先行する。

「……」

「どうなの？」

「…………ないけど…………多分……」

心のなかで「高校生に遺産なんてあつてたまるか!」と叫ぶ。その返答を聞いた鈴の表情が緩む。

「ないんだ!　ないんだね!　良かつたあ!」

イツキは何故いきなり鈴がこんな質問をしたのか訳が分からなかつた。遺産がないと分かり喜んでいるのもよく分からない。もしあつたらどうだと言うのだろうか。

「……一体どうしたんだ?　遺産つて何のことだ?」

「さつきのニュースでね、あるお金持ちの一家が遺産相続を巡って殺人事件に巻き込まれたつてのをやつてたんだ」

休日の昼過ぎ、13時半なんていう微妙な時間帯にニュースなんてあつただろうかとイツキは自分の記憶に検索をかける。

「そんでね、犯人はベビーシッターの人だつたんだけど、それを用務員のおばさんが壁から『いやあねえ』つて見てて、結局それが決め手になつてその人は逮捕されたんだつて!」

鈴の話すニュースは、どうやらイツキがいつも見ているニュースとは一味も一味も違うようだ。不審に思つたイツキはおもむろにチャンネルを手に取り、『番組表一覧』のボタンを押す。

「ニュースなんてやつてないぞ?」

一覧にはニュースなど載つていなかつた。一斉に12時に始まり、頃合いのよい時刻に終わつている。

「ええ?　そんなことないつて!」

「でも、どこにもないんだけど」

「よく見てよ」と、鈴はイツキからチャンネルを奪い取り、番組の時刻軸を13時半辺りに持つてくる。

「ほり、あつた。これ」

ほらと言われるイツキだが、どこにもニュースという文字は見え

ない。

「どれ？」

「これ」

『偽りの果実～呪われた遺産～（再）』

「昼ドーラだよ……」

「ヒルドーラ？ ヒルドーラー？」

「そう！」

「一般的な家庭で起いった事件をデキュメンタリー風に描いたニュースじゃないの？」

「違う！ なんで一般的な家庭に『呪われた』があるんだよ！」

「でもでも！ ちゃんと天気予報もやつてたよ？ 上の方に小さく出てた」

「それ臨時テロップだよ！ なんで天気予報がそんな冷遇されただよ！ いつももっと大きいだろ！？」

鈴のテレビの知識が変なふうに解釈されて彼に押し寄せてくる。最初の頃に比べると段々と会話が成立するようになってきたのは嬉しいのだが、このような一面を見てしまつと、まだまだ鈴が世間では通用しないということは火を見るより明らかだ。

先ほどまで自分が一コースだと思っていたものをバッサリと否定されてしまった鈴もどこか反論したい様子が伺える。

「あ、そうだ！」

鈴は思い出したかのように冷蔵庫の方に駆けてゆく。

「呪われた黒いパン」

「それはお前のせいだろ！ 早く捨てなさい……！」

イツキはふと、始業式のあの一件を思い出す。

「それとな、変にインパクトのあることとするなよな」

「何が？」

「始業式ん時の血口紹介だよ。ノイ……なんたら城とか言ってただ

る」

「ノイシコヴァンシュタイン城のこと? 知らないの? ルートヴィヒ一世が建てたドイツの城で、昔はノイホーエンシュヴァンガウ城って呼ばれてた」

「それ。それだ」

「それがどうかしたの?」

「どうもこうも、普通はそんな自己紹介はしないんだよ。お前がその何とか城を言つた時、先生の顔見たか? 『何言つてんだ?』みたいな表情してたぞ!」

イツキは鮮明に覚えている。

あの空氣、先生の表情。

自分のことでもないのに緊張で喉がカラカラになってしまった、あの時の雰囲気。

全てを。

「……そりなんだ……。じゃあ、チョスキー・クルムロフ城の方が良かつたかなあ……」

「どっちもアウトだよ…」

城の知識は何故か残っている様子の鈴。実に断片的だ。ただせつかく鈴が覚えていたこの記憶は、日常生活を営む上では本当に何の意味もなさない雑学に過ぎない。こんなことではなく、少しでも常識人に戻れるような知識を覚えておいて欲しかつたとイツキは心の底から思つた。

「じゃあさ、イツキは初めて皆と会つた時、どんな風に自己紹介したの?」

「どんな風について、そりゃまあ普通に自己紹介して、『ようじくお願ひします』って」

つまりなそうな顔をする鈴。

「それだけ？」

「それだけだよ。他に誰つひとあるか?」「

「あるよ！　アリアアリだよ！　そんなんじや自己紹介失格だよ、イ

二十九

イツキの田の前に迫りながら説得にかかる鈴。いつもよく分からぬことを言い出す鈴だが、今回のことについては一理あるかもしないと少し思った。クラスの中でも地味な立ち位置のイツキ。もう少しふくらむ垢抜けても良いのではないかと彼自身も考えていたのだ。

「そんじや、どうすりや良かつたと思ひよ?」

「普通過ぎるんだよ、さつきのは！ 私みたいに臨機応変にアレンジを加えつつ自己紹介したほうがいいって！」

あの奇抜な自己紹介は鈴なりの創意工夫の結果だと知りて、その彼女の努力にイツキは少し感心した。

「そうだねえ」と、鈴は腕組みをして考へる仕草をする。

「貧乏神の『神』に、村八分の『村』、いつ来ても誰もいないの『イツキ』で神村イ」

今日も緩やかに時間が過ぎる。

## 出合った日のこと

神村イツキと雪城鈴が出会った日。

それは彼のありふれた日常の切れ端に登場する脇役の内のひとりに過ぎなかつた少女が、一気にヒロインの座を射止めたオーディションかのようだつた。

その日、イツキは終業式を終えていつもの帰り道を歩いていた。明日からは春休み。足取りは普段よりも断然に軽い。何をするでも、何かわくわくするような計画があるわけでも、カノジョと遊ぶでもない。そもそも彼にはカノジョなる存在などいない。そんな極普通過ぎて特筆して述べるようなところなど何もないような彼でも、明日から一週間と少し自由の身でいられると思うと心がわき立つような気持ちになる。ガラにもなく「何か面白いことないかな?」なんて思つてしまつ。

「……！」

イツキの思いは、意外とあっさり神が叶えてくれた。

彼は一人暮らしの自宅へと進めていた足を、思わず止めてしまつた。

まるで時間が停止しているかのような錯覚に陥りそうになる。

商店街の喧騒からも離れた住宅街、彼の視線の先には見たこともない少女。

一言で、とても美しかつた。

昼下がりの日光がその少女の流麗さをより一層際立てる。

一人佇む少女は不安気な表情を浮かべ、何かを探すように辺りをキョロキョロしている。

これは自然に話しかけられる絶好のチャンスではないか。

一瞬、彼はそう思った。

道に迷つたのであれば、親切心として道を教えてあげる。人としてるべき行動。別にその相手が美少女だから、などといつ訳ではない！ と彼は自己弁護をする。

だがしかし、いかんせん彼にはその一步を踏み出す勇気がなかつた。

もし話しかけることが出来れば、知り合いになれるかもしないのに！

友達になれるかもしないのに！

上手く行けばメールアドレス、電話番号でもゲットできるかもしれないのに！

「ありがとうございます！ 今度お礼がしたいので、お暇な時間があれば、またお会いできませんか？」 なんていう展開が待っているかもしねないのに！

あわよくばカノジョに

しかし。

しかしやはり話しかける勇気がない。あと少しでその少女の横を通過しきってしまう。実に惜しい。少しだけでも時の流れが緩やかになればいいのに、なんて有り得るはずもないことを思つてしまつ。

一步、二歩、……。

ああ、彼は通り過ぎてしまった。

彼の青春の一ページはまた何の進展もなくめくられて

「……イツキ？」

聞き間違えだと思った。

イツキは彼の名前。神村イツキ。

初めて会つたその少女が彼の名を知る由もない。

「イツキ……だよね？」

「え……。俺……？」

振り返つた彼は質問をし返す。

「やつぱりイツキなんだね！」

その少女はそう言つと先ほどの不安そうな表情とは打つて変わつてぱつと明るく咲き、彼に飛びついてきた。

「うわ、え！？ 何、何なんだ！？」

「私は雪城鈴と言います。よろしくね！」

鈴に抱きしめられた胸の中で自己紹介をされた。色々なシチュエーションがあるだろうが、こんな積極的な自己紹介をされたのはイツキが初めてだろう。

「ユキシロスズさん……？」

こきなり抱きつかれたイツキは思わず振りほどいてしまう。

「そう、雪城鈴」

「ええと……、俺どこかで会つたことがありますたつけ……？」

「多分あると思う」

イツキはこんな美少女、一度も会つたことなどない。会つたことがあるのならばそれこそイツキがしかと覚えているはずだ。でもそんな記憶全くない。どれだけ脳内ハードディスクを洗い出しても『雪城鈴』と名乗る田の前の彼女は検索に引っかかるない。しかし彼女は名乗つていなければずのイツキの名を知つていた。これはどういふことだらうかとイツキも考えてしまつ。

「何で俺の名前を……？」

「わかんない」

簡潔な返答。だが『わからない』ではイツキも何も分からぬ。

そして続けて鈴はとんでもないことを言つてのける。

「私、記憶がないんだ。だから、何でイツキの名前を知っているかなんて私自身も全然分からぬ。ただほんの少し、断片的に残つてゐる記憶にイツキがいた」

「きなりとんでもないカミングアウトを受ける。記憶喪失など、彼にとつては予想外の展開。テレビやアニメの中でのぞむ」としかなかつた、非常にリアリティの薄いものだ。

「はあ！？ それってつまり、記憶喪失！？ ウソだろおー…？」

もちろんにきなり信じられるものではないに決まつてゐる。

「ウソじゃないよ…」

そんな否定の言葉だけで彼の信用に足るものではない。否定するだけならば誰にでもできる。

「……そんなこと言われてもなあ……。じゃあ、とりあえず警察に行く……？」

「それはダメ」

即刻大否定。

「え……何で……？」

「そうなつてしまつたら、私はイツキと一緒にいられなくなるじゃない！」

言葉の意図が分からぬ。

「一緒に居られなくなる」とこの発言は、雪城鈴自身に「イツキと一緒にいたい」という明らかな意思表示があることを示す。

「『一緒にいられなくなる』って……？」

「お願い！」

急に手を取られる。ギュッと握られたその感触はとても柔らかかつた。

「え、あ、ちょっと……」

「イツキと一緒にいたいダメなの…一緒にないと、私は…！」

『私は』の後に続くセリフは鈴の口からは出でこなかつた。

ただ、その訴える鈴の声はとても彼の心を激しく動かすものであつて。

どこか泣きたくなるような、感傷に浸つてゐるかのような、そんな思いに駆りられる何かがあつて。

可憐で儂い彼女が、今手放してしまつと消え去つてしまいそうな感じがして。

小学生の頃の夏休みの記憶のような、思い出すと涙が流れてしまふような気持ちにさせられる何かがあつて。

彼女の話したことが全て真実だといつ証拠なんてどこにもない。

だが、彼女がウソをついていないことについては本当だと彼は思つた。

「…………」

言葉を紡ぎ出すする彼を、今にも泣き出しそうな瞳でじっかりと見つめる雪城鈴。

「わかつたよ…………」

これが、すべての始まり。

因みに雪城鈴が無理やり神村イツキの一人暮らし室に押し寄せて

くるのはこの数分後の話。

## もし記憶喪失の少女がゲームをすると

ある日、鈴はまた新しいものに興味を持ちだした。テレビの横に置いてあるゲーム機を引っ張りだしている。

「……何これ？」

鈴が引きずり出してきたゲーム機は「プレイスターズ3」。某有名ゲーム会社が去年発表したばかりの最新のゲーム機。インターネットのアクセスはもちろん、アカウントの作成より他ユーザーとの交流やオンライン対戦などを実現可能にした、まさに夢の次世代機だ。イツキもこれでよく遊んでいたのだが、鈴が来訪してからは毎日がハラハラだったので、そんな暇もなくなってしまっていた。

「ねえねえ、イツキ。これ何？」

少し埃がかかつてしまっているそれを、鈴は手で軽く払う。

「ああ、ゲーム機だ。プレイスターズつつても分かんねえよな。これをテレビに繋げて遊ぶことができるんだよ。そういうや最近やってなかつたな」

それを聞いた鈴の目はキラキラと輝いていた。

「今できる？ 今遊べる？」

「ああ、できるけど、するか？」

「うん！！」

鈴は初めてのものに触れたり体験したりする時、とても元気の良い純真無垢な返事をする。今日もそれは健在だ。イツキはそんな鈴を微笑ましく思う。

「じゃ、どれがいい？」

イツキはゲームが大量に入っているプラスチックケースを持ってくる。鈴はそれが床に置かれるやいなや、そのゲームがぎつしり詰まった宝箱を爛々と輝いた目で覗き込む。

「いっぱいあるね！」

「そうだな、俺ゲーム好きだからなー。で、どれがしたい？」

「私が選んでいいの？」

「いいよ」

鈴は「わーい」と喜びながら、ガチャガチャと中身を漁る。イツキはいろいろなジャンルのゲームを持っている。アクション系、RPG、レース、スポーツ、格闘ゲーム。

そして、もちろん……

「ねえ、これは何？」

鈴が奥底から引っ張り出したゲームのパッケージにはいかにも美しい少女といったキャラクターが描かれている。

「あ

「何何？ これはどうやって遊ぶの？」

鈴が引き当てたもの。それは

『ときめいて！ マイスクールライフ』

恋愛シミュレーションゲームだった。

女の子にこの類のゲームを見つかってしまうのは少々恥ずかしい。それがたとえ記憶喪失の少女であっても、気恥ずかしさを感じざるを得ない。

「こ、これは……」

イツキのミスだ。

これがあることを完全に忘れていた。そしてよりによつて鈴がこれに興味をもつという不運まで重なってしまうとは。彼は心のなかで嘆いた。だが別に彼にやましいことがあるわけではない。ゲームが好きな人間としてすべてのジャンルに触れておきたかっただけだ、というのが彼の言い分だ。やましいことがないのだったら、別に口ごもつてしまふことなんてないと思うものの、やはりため息は出てしまう。

「……これは、その、女の子と会話して、気に入った人を恋人にす

るゲーム……」

それでもやはりイツキは少し気まずさを覚える。女子に説明するなど、実際には恥ずかしいものだ。

「ふうん？ それって面白いの？」

「お、面白いつていうかな！ あの、アレだぞ！？ 僕は色々ジャンルのゲームに手を出したかつただけで！ そんな、これが好きとか」

「なんかわかんないけど、これにしよう！ イツキ、これにする！」誰も責めていないのに勝手に言い訳を始めるイツキを尻目に、鈴はこのゲームをすることに決めてしまつ。

「…………！」

「どうしたの？」

イツキは観念する。本当にやましい気持ちはないので別に構わないのだが、やはり氣恥ずかしい。鈴から『ときめいて！ マイスクールライフ』を渡してもらい、ゲーム機にセットする。

「コントローラーのボタン操作は分かるか？」

「ん。ま、だいたい。押してる内にわかつてくるでしょ」

適当にボタン操作の練習をする鈴。おかげでオープニングムービーがスキップされる。次に名前の入力画面が出てくる。

「えと、『ゆ』……『き』……」

順調良く自分の名前を入れる。ただこれは男向けの恋愛シミュレーションゲームなので鈴本人の名前を入れると少々変なのだが、イツキはその辺は目を瞑る。

「あ、始まった！」

ゆきしろすず『俺はゆきしろ すず。』の学校が今日から俺の

「

「…………俺』だって。主人公は男の子なのかあ

恋愛シミュレーションゲームをする人は大体が男である。

イツキはあえて静観。

初めてするゲームに口を出されることはゲーム好きにとっては流罪に値する行為だと思っているからだ。

ゲームは会話中心といふこともあって、何ぶんつまる所もなく進行していたのだが……

藤田あかり『あ、すずくん！ 今日は一人で帰るの？ ジャー一緒に帰ろうよ！』

本作ヒロイン藤田あかり。彼女を落とすことがこのゲーム最大の使命だ。

「この人さつきからじつこくない？」

まさかのクレーム。

ヒロインからアタックしてくれているのに邪険に扱う鈴。

ゆきしろすず『うるさいな、俺は一人で帰りたいんだ』

藤田あかり『うーんめんなさい。そうよね、一人でいたいときもあるわよね……』

「ふふん、言う時は言つてやらねば！ でも拒否の選択肢が何でキレイ調なんだろ」

してやつたりのつもりの鈴。

その非情な返答の選択に、イツキは藤田あかりに同情する。

その後鈴は暴虐の限りを尽くした。

体育祭では必死にアプローチをかける藤田あかりを振り切り他の女子と組んで優勝。帰り道のたびに最悪の選択肢。会う度に拒否の選択。更に他の女子にも気があるふりをしては、デートの日は家に引きこもるなどの謎行動。これでは誰も寄つてくるはずがない。

そして、当然結末は

ゆきしろすず『結局、俺の青春は誰とも付き合ひのない灰色の学生生活で幕を閉じてしまった。ああ、もう一度最初からやり直すことが出来ればなあ……！』

B A D E N D 【データを消去しました】

「  
…  
」

悲しいBGMが流れる。

「  
…  
イツキ  
」

「え？ あ、ざ、残念だつたな！ でもまあ初めてだし、仕方ないつていうか！」

「このゲームつまんない」

そう言つと、すぐにゲーム機からソフトを引っ張り出してパッケージにしまい込む。少し不機嫌そうな感じがする。

「女の子はダメだね。こっちの心理、ひとつも分かつてくんないんだもん！ 冷たくするのも戦略つていつじやない！ そんな基本的なことも分かんないなんて、所詮は機械だよ！」

記憶喪失の女の子におもいつきり叩かれる『ときめいて！ マイスクールライフ』。しかし最悪な選択肢を選びまくった鈴に原因があるのは一目瞭然だ。ただ、それを今こ立腹の鈴に言つときつと怒るだろうから、イツキはそれ以上の言葉を口にしなかつた。最後には「藤田あかりは口クでもない男を掴まされるね」などという捨て台詞まで吐かれる始末。鈴は藤田あかりに何の恨みがあるのでどうかとイツキは勘ぐつてしまつ。

「次行いり、次！ ああいのは私には合わなかつたんだよ！ きっと！ 「

再びゲームの山に手を突っ込んで、次なるゲームを探す。

「これは何？」

鈴が手に取ったゲームは『列車にGO』。

日本各地の鉄道をリアルな背景を鑑賞しながら走る、運転士気分を味わうことのできるゲームだ。

「電車のゲーム」

「電車を運転するの？」

「そうだよ」

「おもしろそう!..」

早速ソフトをセットする。

（～5分後～）

「？ ハハ、なんて読むの？」

画面には『GAME OVER』の文字。

「ゲームオーバー……」

「えー！ もうダメなの？」

「そりやそうだよ!! 開始早々120キロ全開で走りだす丸の内線つて聞いたことないよ！ いきなりATS作動じゃねえか!! 南阿佐ヶ谷駅の乗客乗せる気なさすぎだら!!」

ATS：自動列車停止装置。

電車が信号などを無視して冒進した時、暴走運転を行った時など、危険を察知した際に強制的にブレーキをかける装置。これが発動したということは、鈴は完全なる暴走運転士であつたということだ。

「…………面白いない。全然うまく行かないんだもん

ぱつりと一言呟く。

「最初のうちには仕方ない部分もあるけど、鈴の場合はヒロイン冷遇だしいきなり電車暴走だし、なんというか擁護する点がないよなあ」

鈴はコントローラーを傍らにおいて、首を捻り体操をしてくる。

「ひなた面田へなここのハマるなんて、イシキはどうなの？」  
「違ひよ。」

その後イシキは狙撃ゲームを鈴とタッグでやつてみたが、彼女に至近距離で銃殺されたからすぐに止めた。

鈴が台所で何かを作つてゐる。

いつものだらしのない格好にエプロン姿が異様に似合つてゐる。台所からは何かをかき混ぜるカシャカシャという音が聞こえてくる。

くされていた。

鈴が冷蔵庫から取り出した料理を頭上高く突き上げる。『じつやら  
冷やして完成するものだつたようだ。そしてクルツといからに向く  
と、小走りでそれをイツキの見守る居間まで持つてきた。

「そりだよ！ 作つたから食べて！」

「同手擦色のまことだカジ・

「靈異二編」卷三

真ん中のさくらんぼが砂場に放置された赤いスコップのようだ。

鈴は「いいから食べてみてよ！」とイツキを促す。いつもは鈴のハズレくじを思いつきり引かされるイツキだが、今回の杏仁豆腐の茶色の原因はシナモンの可能性がある。それならば間違つても甘すぎるだけで済むだろうと、イツキはスプーンを進める事にする。イツキが杏仁豆腐をスプーンで掬い口に運ぶさまをワクワクしな

がら見つめる鈴。

۱۰۷

「……」  
ツツ……

不味さで悶絶するイツキ。想像している不味さとは違う方面的強烈な不味さがピッチャーライナーのような回避不能の勢いで彼に襲いかかる。のたうち回る彼の横にいる鈴は「おおう……」と小さく声で驚く。

「ど……どしたの……？ そんなに……？」  
「どうしたのじゃないって！ 何でこんなにマズイんだよこれ……！  
不味すぎるよ！ 塩辛いタイヤの味がするよ……！」  
机を両手で叩きながら抗議するイツキはまるで駄々をこねる園児のようだった。

「そんなにかあ……」

鈴は視線を茶色く濁つた「元」白い悪魔にむけながら恐れ慄ぐ。イツキは既に台所の蛇口で一命を取り留めたようだが、それでも口に残る強烈な不快感を拭いきれなかつたのか炭酸飲料を大量摂取している。

「一体何を入れたんだ!? 奇跡的な不味さだぞコレえ！」  
「砂糖と……唐辛子と塩とコショウと山椒と挽き割り納豆」「マツドサイエンティストか!! 質の悪い郷土料理みたいなレシピじゃねえか！ 何でそんな冒険に走るんだよ……」

### 【杏仁豆腐の正しいレシピ】

・杏仁霜、牛乳、粉寒天、砂糖、ゼラチン、好みのフルーツ各種。

杏仁豆腐がきちんと固まつていたところを見ると鈴は作り方を間違えたのではない。完成したその後のチョイスを全て誤ったのだ。  
「甘いものって、反対に塩とか入れたら甘さが引き立つっていうから……塩氣のあるものをいれてみただけど……」

ゼンゼニやお汁粉に少量の塩を加えると甘さが引き立つところは事実。科学的にも証明されている。鈴はこれを覚えていたのだ。

今回の事件はうろ覚えだった故に招いた惨事だと言えよう。

「……あのなあ、そういうのはあくまで隠し味程度なんだよ……。ゼンゼニに大量の塩昆布がついてきたら嫌だろ?」

「うーん……。それでも私なら全食べちゃうかも」

鈴は細身ながら意外と何でも食べる。

「そ、そうか。で、塩は分かる。山椒とコショウと唐辛子も百歩譲つて分かるとしよう。だが納豆! これは何のつもりだ?」

ひき割りだつたためあまり目立たなかつたが、不味さの根源にはこの存在が大きかつたのだろう。

「好きだつたから」

「納豆はフルーツじやありません!」

杏仁豆腐はそそくせと冷蔵庫に片付けられた。神村家の家訓には『食べ物を粗末にするべからず』というものがある。幼い頃からその教訓の下に教育を受けたイッキは今回の塩辛いタイヤのような味のする杏仁豆腐も捨てられる決心がつかなかつたので、少しずつ食べて処理する方針を採用した。

「鈴が作つたんだから、鈴も手伝えよ」

「えー……」

明らかに嫌そうな表情を見せる。

「『えー』じゃないだろ! 製造物責任法に則つた正当な裁定だ。

本当は鈴が全部食つて欲しいくらいのところを譲歩してやつてんだから、文句言わない!」

「P-L法つてやつだね。仕方ないなー」

「おお……、そう、それ」

所々覚えている鈴にたまに驚かされる。ましてやP-L法などとい

つた一般人にはあまり縁のない法律名だ。もしかすると鈴は記憶を無くす前は博識だったのかもしれない、と彼は思った。

「そもそも、何でいきなり杏仁豆腐なんて作ろうと思つたんだ？」

「調理実習の練習」

イツキは思い出した。明日の金曜日、家庭科の時間に調理実習があつたのだ。

「ああ、そういうやそんのあつたな」

「そうだよ、女子としてここで女子力があるといふを証明したことかいとね！」

「女子力ないとこを思いつきり俺に見られた後だけな」

鈴はハッとした表情を見せる。

「い、今のは無効だよ！　さすがに！」

「何がどう『さすがに』なんだよ……。そもそも鈴が半ば無理矢理に食わせる展開に持つていったんじゃねえか」

「！　とにかく！　今のは無効なの！」

顔を真っ赤にしてムキになる鈴。これ以上責めると鈴の機嫌がとても悪くなるのをイツキは知っている。なので言及するのはここで打ち止めにしておいた。

明日（次話）は調理実習。

## 調理実習！

私は流浪の剣客……。

今宵も血を啜らんとする我が刀の赴くまま、流離い歩く……。

突然、後ろから刺された。

私は死んだ。

「 という夢を見ましたッ！」

「 ……鈴、何か不満があるなら謝るよ……？」

清々しい朝である。

朝ごはんには昨夜作成された塩辛いタイヤ（杏仁豆腐）が食卓に

出された。イツキは覚悟を決めて一気に水で流し込んだからまだ良かつたものの、その味を甘く見ていた鈴は聞いたことのないような唸り声を上げながら涙目で完食していた。そのせいでテンションの下がった二人はそのまま学校へ向かつたが、学校が近付くに連れ鈴は徐々に元気になつていつっていた。対するイツキはテンションの低いまま。切り替えがきちんとできる鈴を羨ましく思いながら校門をくぐつた。

「次は調理実習だね！ 鈴！」

3時間目の休み時間。

クラスの生徒たちが家庭科室へ赴く中、早坂千秋が鈴に話しかけてきた。千秋は肩ほどまでの髪の毛と健康的な可愛さのある、イツキと鈴の同級生だ。鈴とともに仲が良い。

「うん！ 昨日練習しちゃつたよ！」

「ええ！ やる気まんまんじゃん！ ケーキ作つたんだ？ 班が一緒だから心強いなあ」

「え……」

「…………」

千秋は少しだけ首を傾げる。

「…………うん…………」

鈴は明らかに頃垂れる。漫画で表すならば、うつろな眼の辺りに黒の縦線が何本も入つているといったところだ。

早坂千秋は悟つた。鈴の沈黙が何を物語つているか、手を取るようにな分かつた。

「あ、す、鈴！ 大丈夫だつて！ たとえ違うものを作つたとしても練習したことに価値があるんだよ！」

「そうかなあ…………」

さつき肯定の返事をしたのに、肩をすくめて直ぐにミスを認める鈴。千秋はそんな素直な彼女を同性ながらも少し可愛く思つてしまふ。その会話を後ろで聞いていたイツキは、先程に増してテンション

ンの上がる要素をえぐり取れた気分だった。「俺はただ鈴の失敗料理を食べさせられただけだつたのか」という、結局何も収穫のない犠牲を払つてしまつたことになつたのだから、そんなふうな気持ちになるのも分からぬでもない。だから友人に「どうしたんだ? 調子悪いのか?」と聞かれても、イツキは作り笑いを浮かべて「何でもないさ」と答えるくらいの対応しか出来なかつた。

家庭科室には $2 \times 3$ の配置で調理台が設置されている。雪城鈴、神村イツキ、早坂千秋は偶然にも同班。5人班が基本なので、後二人は男子が編入されている。

「な、なあイツキ! 僕達ラッキーだよな!」

「へ? 何が?」

そわそわする友人一人。

「だつてよ、口リ巨乳童顔の鈴ちゃんに超可愛い千秋ちゃんと同じなんだぜ!? ああ、他の男子の舌打ちがまるで祝福の喝采のように聞こえてくるようだ!」

イツキの左に座つている男友達一人が勝手に小声で盛り上がりつてゐる。

鈴は身長147センチながら、それに似合わない胸を携えている。だからイツキは彼女の風呂上りの時など視線のやり場に困ることが多々ある。鈴はそういうことに無頓着などころか、からかつてくるのでいつも対応に困つている。

「! だよなあ! お前もそう思うだろ? イツキ!」

「え? あ、ああ。そうだな」

脳内で鈴の苦労話に花を咲かせていたイツキは友人一人の会話など完全に黙殺していたので相槌だけしか打つことが出来なかつた。二人は鈴と千秋に憧憬を抱いているようだ。いや一人だけでなく、鈴と千秋はクラス中どころか学年単位で人気がある。だが、千秋はよしとして、彼らは鈴の蛮行の数々を知らないから憧れを抱けるのだ。ついこの前も買つてきたばかりの香りつきの石鹼を食べ物だと

勘違いして齧っていたし、炭酸飲料を劇薬だと思っていたらしいし、赤ペンを見て「血だ！」と騒いでいたし、モニターがパソコン本体だと思っていたらしいし、赤信号は『覚悟を決めて渡れ』のサインだと思つていたくらいだ。鈴は彼らが想像するお姫様のような優美で嬢媛な女性ではない。少なくともイツキはそう思つてゐるので、彼らの意見はイツキの心に響くものではない。「鈴のこと知らないから、そんなこと思えるんだよ」と心のなかでため息を付いてしまう。だがそんなことも口に出して言えるはずもない。彼が鈴と同居していることがバレるのは絶対に宜しくない。記憶喪失と同じくらいトックフシークレットの機密事項だ。これがバレてしまえば騒ぎになるどころの話ではないだろ？ 鈴もそのことはイツキから厳しく言われているので決して口にすることはない。

ホワイトボードには「チーズケーキの作り方」とでかでかと書かれている。その文字を見た鈴は、またひとりで小さく落ち込む。  
「鈴は間違つて何を作っちゃつたの？」  
うつむく鈴に優しく問いかける千秋。  
「……塩辛いタイヤ」  
「何それ！？」

因みにこの早坂千秋は小学生の頃のイツキの幼なじみ。偶然にも高校で再会することができたのだが、当時より増して数段以上も可愛くなつた千秋を見た時の衝撃はイツキの胸にまだ印象深く残つている。

先生が各自指示を与える、調理実習はスタートする。

#### 【ベイクドチーズケーキのレシピと作り方（一人分）】

- ・クッキー（市販）50g
- ・バター 30g
- ・クリームチーズ 250g
- ・サワークリーム 50g

- ・グラニュー糖 70g
- ・卵 1個
- ・生クリーム 100g
- ・レモン汁 小さじ1
- ・薄力粉 10g

?クリームチーズをレンジで柔らかくしておく。同時に薄力粉もふるいにかけておく。

?クッキーを碎き、溶かしたバターを加えて揉み合わせる。（これがケーキの一一番下の生地になるので、型に敷き詰めておく）

?ボウルにクリームチーズとサワークリームを入れて、よくかき混ぜる。

?グラニュー糖を2・3度に分けて加える。

?更に薄力粉も追加し、混ぜる。

?次に、卵を2回に分けて加えかき混ぜる。

?完了したら、同様に生クリームも2回に分けて加え、かき混ぜる。更にその後にレモン汁も加える。

? ? の上に? ? で完成したものを流し込む。

?170 のオーブンで50分焼き、完了後適度に冷やす。

完成！

味王のレシピ『 様より )

( 『 甘

調理は滞り無く行われた。

イツキなど男子二人はかき混ぜる等の力仕事を任せられ、全体の指示は千秋、鈴は細かい仕事を任せられた。鈴に細かい仕事を任すのはとても危険だと思っていたイツキだが、今回は周りに塩などの余計な調味料がなかったので鈴も迷うこと無くこなすことができているみたいで安心して見ることができた。逆にクッキーを粉々に碎きす

ぎた男子達が千秋に注意されるくらいが唯一の失敗で、鈴は何もおかしいことをしなかつた。それどころか一度見たレシピを間違うこと無くそのまま実行し、とても手際がよく見えた。塩タイヤを作った本人とは思えないほどだ。元々杏仁豆腐だって調味料を大量投入したからあのような食べ物ではない味になつただけで、形としてはきちんととしていたのだ。食感も確かに杏仁豆腐そのものだったのだ。以上の観点から考へるに、鈴は実は料理が上手いのではないかとイツキは完成したケーキを食べながら思う。

「美味しかった！ やっぱり美少女が作る手料理は最ッ高だな！」

「おうよ！」

と男子一人はとてもご満悦の感想を述べる。

「鈴、料理上手いじゃない！ 何か学校でも通つてたの？」

千秋は男子達が洗う食器を拭きながら鈴に問いかける。

「？ 学校なら今も通つてるよ？」

「へえ、そなんだ！ 道理で上手いと思つたよ～」

千秋はすっかり感服しているようだが、鈴は料理学校になど通つていらない。通つているわけがない。イツキの家で同棲（内緒）しているのに、鈴を料理学校に通わせられるお金があるわけがない。「また勘違いしてやがるな……！」と声にしたいけどしてはいけない状況にもどかしさを感じまくるイツキ。きっと鈴は千秋が尋ねた『学校』を『高校』だと勘違いしたのだろう。記憶が細切れになつている鈴に『料理教室』などという概念などが存在していないとしても不自然ではない。

「ね、イツキ！」

流し台で食器を洗うイツキの横で、洗い終わつたそれらを拭いている鈴が話しかける。

「美味しかった？」

「ああ、美味しかったよ」

「女子力、証明できたかな？」

「十分だろ。御見逸しまし」

ふといツキは鈴の顔を見る。

「良かつたあ……」

雪城鈴の満面の笑み。

「……」

イツキは思わずドキッとしてしまった。

いつも見ている鈴がこんなにも可愛く見えるなんて、思いもしなかつた。とんでもない不意打ちだ。

思つてみればこんな美少女とひとつ屋根の下で暮らしているのだ。ずっと忙殺されていたイツキだが、冷静に思い返してみれば世の男性から『モ』が起きてもいいくらいの幸運。

「お、おう……」

イツキは照れ隠しで視線をそらす。

今まで感じたことのない不思議な感覚だった。

## 鈴は勉強ができない？

今日はクラス全員の気分が重い。まるで葬式でもあつたかのような雰囲気だ。あの鈴でさえ空気を察していつもの元気さを抑えているような感じがする。早坂千秋は普段と何ら変わらない様子だが、彼女は別だ。この案件とは全く縁のない、別世界に住む人間だからだ。しかしクラスの九割五分は残念ながら関係者。神村イツキもその内のひとり。逃れる術などなかつた。

「それじゃテスト返すぞー！」

### 一学期中間テストの返却の時間！

先生は出席番号の若い順に次々と生徒を教卓前に呼び出し、点数の書かれた、もはや宣告書と化したテストを容赦無く返却する。先生はテストを返す際に一言ずつ感想というかコメントをつけている。頃垂れる生徒や安堵の表情を浮かべる生徒、天国行きと地獄行きが分かれる瞬間だ。

「イツキ、どうだった？」

休み時間になり、早坂千秋がイツキの机の前までやつてきて話しかけてきた。彼女はいつも点数が良い。高得点マニアかと言わんばかりに80～90、もしくはそれ以上の点数を叩き出してくる。そのことは高校1年生だった時の千秋の成績表を見ればよく分かる。

「65点」

「超普通だね」

「そうだな。欠点じゃなくつて良かつたよ」

欠点は39点以下の点数を指す。この点数をとつてしまつと、学業単位に響いてしまつので生徒たちはこの数字を忌み嫌つてゐる。

「千秋は何点だつたんだ?」

「92点」

「聞かなきや良かつた」

「ちょっと! 聞いといて何よ!」

黒板はまだ田直によつて消されておらず、先生が書いた最高点が誇らしげに残つている。その点数は『92点』。早坂千秋のそれだつた。

「ちょっとと答案見せてよ」

早坂千秋はイツキに自分の答案を手渡す。几帳面に折りたたまれたそれを開けてみると、当たり前だがほとんど正解の丸がついている。しかも点数が引かれているところは三角だけであつて、バツは一問もなかつた。

「……。外国なら千秋は8点だな」

「残念日本でした」

「はあー。なんでそんなに点数良いかな? ……」

イツキ自身も不毛な問だとは分かっているのだが……。

「勉強したから」

その通りである。それしかない。

ただイツキも勉強をしてない訳ではない。自分が納得行くまでとはいかないが、それなりにはきちんとしている。点数は見ての通り、何も栄える所もなく収まつてしまつ。65点は誇るほどの点数ではないが、別に恥じるような低得点といつわけでもない。だが幼なじみがクラス最高点を取つてしまつては、イツキの自尊心を軽く突つくものがあるのだろうか。ビートなくやり切れない表情を浮かべる。

「鈴はどうだつた?」

鈴はイツキの右斜め前の席に座つている。席が近いのは彼にとてもとも好都合なので、この幸運には感謝している。

「どうつて、何が?」

「テストのことよ」

「そう、テスト。何点だつた?」

因みに今日返却されたテストの教科は英語。高校2年生の彼らに課された内容は決して簡単なものではない。しかも彼らの通う高校は俗にいう『進学校』であるということからも、その難易度が中々に高く設定されているのは御察しできるだろう。

「ああ、テスト。さつきのだね」

その通りだ、おもむろに机の引き出しからテスラを引っ張り出す。

「6点だつた」

6

100 雜誌中編

る。

卷之六

大絶叫の後の不気味な沈黙。

顔を引き離せながら千秋が尋ねる。

「してなかつた」

ケ口りと答える鈴。状況のヤバさが分かっていないようだ。イツキもその鈴の発言通りの記憶しかない。確かに鈴は勉強など全くしていなかつた。『ときめいて！マイスクールライフ』で藤田あかりから逃亡する日々を送つたり、塩タイヤ作成に精を出していたり、勉強している描写など全くなかった。こう思い返してみると、この

「ええー！ダメじゃない！ちゃんと勉強しなきゃ！」

自分のことのように焦る千秋。イツキも内心は焦りまくっている。まさか鈴が勉強のできない子だったなんて思いもしなかつたのだろうか。そもそも勉強以前に記憶がないのだから、そんな努力は最初から無駄だったのかもしれないが。

「えへへ」

「『えへへ』じゃないだろコレ……。ていうか逆に何が合ってたんだ？」

鈴の答案をくまなく見る一人。

『問12 イ』

これに丸が付いていた。

「おい！ イて！ イテエエツ！」

「勘で書いたら合つてたんだ！ 天も見捨てたもんじゃないねえ」「見捨てられまくつてるよ！ 」これでもかつてくらい見捨てられてるよオ！」

『裏面 問40 イ』

「……鈴、分からなかつたら『イ』にしてるの？」

「恐らくは」

「自分で書いたのに何で他人事みたいな言い回しなんだよ……」

この2問で6点。それ以外は紛れも無く全てバツ。面白いくらいに全部バツ。三角さえ「えられない程にバツ。バツの嵐だった。

『次の和文を英文にせよ。 1： 私たちは世界中の恒久の平和を中心から願っている。』

## 【鈴の答え】

『We are pessi!』

鈴に回答を返す際に一瞬だけ見えたこの答えに、イツキは戦慄を覚えた。

「鈴！ 鈴！ これはマズいって！ 先生のとこ、相談に行こ？」？  
ね？」

千秋は他人事ではない様子で心配する。確かにこれはとてもマズい。イツキもこの意見には大賛成で、半ば強引に鈴を職員室まで引つ張つていった。

「失礼します」

3人は行儀よく扉を開け、挨拶と一礼を済ませる。

「あの、先生」

「おお、どうした？」

顎にうつすらと鬚を生やした、40代前半の英語教師。愛嬌のある顔と陽気な性格でクラスの皆からも慕われている先生だ。

「あの、雪城さんのことなんですが」

「ほら鈴、自分のことなんだから自分で言えよ」

イツキに肩を押されて最前面に押し出される鈴。

「……あの、私は6点なんですけど、大丈夫なんでしょうか？」

鈴の6点発言に思わず再び吹き出しそうになるイツキ。これは少しジワジワくるものを感じているようだ。だが千秋の「笑つてられる状況じゃない！」という視線に気付き、こみ上げてくる笑いを必死に噛み殺す。

「ああ、ま、大丈夫じゃないか？」

先生の口から出てきたのは、彼らの予想を良い意味で大きく裏切

るものだつた。

「そうですか！　ありがとうございます！　ね、二人共、私だいじよ」

「　何で！？」

イツキと千秋は同時に尋ねる。先生はその剣幕に一步引いてしまふほどだった。

「だ、大丈夫なもんは大丈夫なんだから仕方ねえだろ？」

「6点ですよ！？　6点！－　このままじゃ雪城さん、留年しちゃいますよ！」

1年を通しての各教科の平均点が39点を下回ると自動的に留年が決定してしまう。

「……雪城の現在の英語の平均点は53点だ。転校生はお前らと違つて入試の点数も大きく考慮されるんだよ。その結果分の貯金があるから、まだ大丈夫だ。ま、6点には俺も笑わしてもらつたけどな二人は「え……」と言葉を失つてしまつた。

6点をとつて平均点を53点にする方法。  
簡単な方程式だ。

$$(6 + X) \div 2 = 53$$

「100点……？」

イツキと千秋は驚嘆してこれ以上の感想を述べることが出来なかつた。あの「We are pessi！」などと真剣に書くような子が、進学校の受験で100点。とても信じられなかつたが、先生が嘘をつく義理もない。しかも、本当に紛れも無い真実なのだから認めざるを得ない。

「なあ、鈴。おまえ……」

振り返ると鈴は何でもないような表情で一人を見ていた。

「ね、心配なかつたでしょ？」

可愛らしげに微笑む鈴。

受験は、おそらく鈴が記憶喪失前に受けたものだろう。

記憶喪失前の彼女は一体、どんなヒトだったのだろう？

鈴の謎がまたひとつ増えた瞬間だった。

鈴は勉強ができない? (後書き)

「J意見、「J感想などあつまつたらお気軽上記へお書き入れ!」

## 幕間～一学期中間テスト 鈴の誤回答集～

～～幕間～～

### 鈴の誤回答集

#### 【英語】 点数：6点

次の和文を英訳せよ。

問：“現在のアメリカにおける経済政策は、日本に多大な影響を及ぼす可能性が高いものである。”

#### 【鈴の答え】

『The economy of America will be Japanese.』

問：“10時から12時は車の通行が多いため、この通りを渡るときは注意しないといけない”

#### 【鈴の答え】

『（Th 消した跡） イ』

次の英文を和訳せよ。

問：“We were not able to believe the occurrence which happened in the gym”

**【鈴の答え】**

『ジムの体内では私達が信じられないことが起っていた』

**【国語】** 点数：84点（クラス3位。現代文満点、古文全滅）

次の古文を現代語訳せよ。

問：『つれなき顔なれど、女のおもふことといみじきことなつけるを、』

**【鈴の答え】**

『つれない顔をしているけれど、女が思ひことつゝも顔に出ないのですよ』

問：『次の単語の読みを書け。』

?蔵人    ?上達部    ?刀自    ?女御

**【鈴の答え】**

?クロード    ?じょうたつぶ    ?ばじ    ?じょい

**【数学】** 点数：86点（クラス2位。計算問題応用問題は全て正解。特殊な方程式を使う部分は全滅）

問： $0 \times 2^2$  のとき、 $\cos(2 - 4) = 3/2$  を求めよ。

**【鈴の答え】**

『解なし』

その後分からぬ問題には全て『解なし』と回答。

【生物】 点数：46点

次の生物の名前を答えよ。（『』真）

答え：?ボルボックス ?ミシシッコ ?ミカヅキモ ?ゾウリム  
シ ?プラナリア

【鈴の答え】

『?リーゲルショライダー ?虫 ?ヒューリット ?ゲアー ?  
シェンデロス』

問：『個体がホモ接合体YYの遺伝形態を答へよ』

【鈴の答え】

『死』（正答：致死遺伝子）

【日本史】 点数48点

空欄を埋めよ。

問：（ ）は洒落本の作者であり、（ ）は黄表紙作者である。

【鈴の答え】

『（馬子）は洒落本の作者であり、（馬子）は黄表紙作者である。』

問：大津事件で負傷したロシアの帝国大使は誰か。

【鈴の答え】

『チエブラー 力』

計5教科270点、全教科平均点54点。

学年158人中76位。

普通……？

幕間～一学期中間テスト 鈴の課回答集～（後書き）

話の進行とは全く関係の無い小話です。  
「」意見、「」感想などあつましたらお気軽にどうぞ！

絶対に負けられない戦いが、そこにはある

一学期の中間テストが終わって、もう5月も半ば。夏の足音を感じ始めるこの頃は、その前の恒例行事である梅雨がやつてくる季節もある。鈴は雨が降るたびに、つまらなそうな顔をしながら閉めた窓から外を眺めている。鈴は元気で活発な女の子だ。強制的に部屋の中に閉じ込めさせられる雨は、きっと嫌いなのだろう。確かに鈴は部屋に閉じ込めておくよりも草原や野原で自由に駆け回らせるほうが似合っている。例えばスイスのような清涼な高原を白いワンドピー、白い帽子で駆け巡る姿なんて簡単に想像できるくらいだ。体を動かすことができなくてウズウズしている様子がよくわかる。鈴が深い溜息をつくときは、たいていつまらない時。つここの前がまさにその時であった。

2時間目が終わるチャイムが学校に響き渡った。

「よっしゃー！」

鈴はガタツというイスの音と共に立ち上がる。

そしておもむろに制服のカーディガンを脱ぎ、リボンを外し、シャツのボタンに手を

「……！　ちょ、ちょッ！　ちょっと鈴……！」

早坂千秋が脱兎のごとく駆けつけ、自分のシャツのボタンを外す鈴の手をがつしりと押さえる。イツキも急いでその奇行を止めるべく半歩踏み出していたのだが、それでも千秋のほうがずっと速かった。

「何してるの！？」

「え、着替えようとしたんだけど……」

次は体育の時間。

鈴が待ちに待つた体育の時間。

ずっと雨に降られてフラストレーションが溜まりに溜まつた鈴が思い切り発散できる体育の時間であったのだ。

「まーだーダメーだーよーッ！！」

千秋は鈴の手を握っていた手を両肩において必死に説得する。

「男子がツ！ 男子がいるでしょう！？ 何のための更衣室！？」見渡すと、男子の視線は鈴に大注目されていた。不覚にも、止めに入ろうとしたイツキもその内のひとり。いつも鈴と一緒にいるとはいえ、このようなシチュエーションで心躍らないわけがない。あと少しで下着が見えてしまう絶妙のボタン位置まで来て千秋に制止されてしまつたものの、逆にその光景が男子としてはそるものがあるのか視線は集まつたままだ。美少女が美少女に過ちを犯さないよう必死に説得する姿は、その説得内容がどうであれ何処と無く美しく映える。……ような気がする。

辺りを見回す鈴。鈴と田があつた男子達は顔を赤らめながら急いで視線をそらす。

「うーん、じゃあ早く行こうよー 更衣室！」

「分かつたけど、ボタンはちゃんと閉めてネー？」

はやる気持ちが鈴を急がせる。

イツキはこの一部始終をほとんど何も出来ずに傍観してしまつていた。彼としても制止に回りたかったところだが、突然のことで対処が遅れてしまった。イツキは千秋に土下座級の感謝を心のなかで行つた。

「なあ、イツキ」

調理実習の時一緒にいた男子生徒の友人が話しかけてきた。

「俺は、鈴ちゃんはうだと思つんだ」

「……はあ？」

「見た感じMっぽいのに実はSで、しかもあの誰もが可愛いと認める天使のような容姿！ 天は二物を与えたな！」

悟りを開いた哲学者にでもなつたかのような口ぶり。確かに鈴の容姿は非の打ち所がない。

「せつと、ベッドの上でも

「お前は何を言っているんだ

外は快晴。

雨上がりの人工芝の校庭は、雲が日光に反射してキラキラと輝いている。

「鈴は元気だな……」

体操着に着替え終わり、校庭に出たイツキは独り言のようにボソリと呟く。女子と戯れる鈴はとても活き活きとして、気持ちがよさそうだ。それを確認したイツキも少し笑顔になってしまつ。

「何、鈴ちゃんを見てニヤニヤしてるんだよ」

「え？ いやいや、そんなつもりは……」

「まあ見るだけなら許してやろう?」

「許す?」

「ああ！ なんてつたつて『俺の嫁』だからなー」

その発言をしたとたん、彼は男子の渦へと引きずり込まれていった。鈴は人氣があるので、そのような発言には注意を払ったほうがいい。イツキは苦笑しながら男子の渦に投げ込まれた彼を見守ることしか出来なかつた。

「……人気あるんだなあ……」

イツキは鈴の人気を再確認する。

あれだけ人気のある鈴を、日常生活で独り占めしている今の状態。イツキは少しだけニヤついてしまう。

しかも全て内密というところがまた、イツキ的にグッとするものもあるようだ。普段はそんなことを鈴に悟れられないような言動をしているが、内心ではニヤつきが止まらない。

「はい、じゃ、今日はひつさびさんに晴れたことだし、サッカーでもするか！ じゃあ男子と女子に分かれてー」

上下ジャージ姿の先生が首に笛をぶら下げながら指示を出す。

「わーい！ サッカーだ！」

思いつ切り体を動かせるサッカーは鈴にとっては好都合。イツキは彼女の喜ぶ様子を見て、「サッカー、覚えてたんだ」と脳内で率直な感想を述べる。

女子たちは4チームに分断された。1チーム4人。

「頑張ろうね！」と声を掛け合つ鈴とそのチームメイト。

### 【Aチーム対Bチーム】

Aチームには雪城鈴、Bチームには早坂千秋が所属している。

早坂千秋は容赦などしない。勉強も容赦はないし、小さな勝負事だつて容赦はしない。ましてや目に見えて点数という数字で現れるスポーツなんて、容赦するはずがない。これは彼女なりの流儀なのだ。どんなことであれ、手を抜くことは相手にとつて失礼なことであり、同時にそれは自分の予防線となってしまう。この理念に従う千秋に、勝負事で慈悲は期待できない。Aチームの面々もスポーツ万能の千秋のいるチームを初戦で迎えることになってしまい、早くも諦観が見られている。

「皆、どしたの？」

そんなことを全く知らない鈴はチームメイトに尋ねる。

「千秋が相手にいたら、勝てる気がしないよお」

「そうそう、千秋は運動もできるからねえ」

既に諦観の漂うチームの雰囲気。

「そんなにスゴいの？」という鈴の質問も、質問途中に肯定されるほど。鈴は「よっぽどなんだ」と悟る。だがそこで同じように諦観に染まるのではなく、それどころか「へえ」と不敵な笑みを浮かべた。

Aチーム対Bチーム、キックオフの笛が鳴り響く

！

絶対に負けられない戦いが、そこにはある（後書き）

「J意見、J感想などあつまつたらお気軽によべりやう！」

## 意外と真剣勝負

ボールはBチームからのキックオフとなつた。

鈴は相手チームの早坂千秋から目を離さずに、味方選手がボールを奪取する瞬間を伺う。だがしかし、一度早坂千秋にボールが渡ると小刻みなボールタッチと一瞬の加速力で鮮やかに抜き去り、最後は一対一になつたゴールキーパーまでつさりと躲されてゴール左に簡単に流し込まれた。

【A 0 1 B】

「ほら、千秋、凄いでしょ？」

千秋にディフェンスに行つていたチームメイトのひとりが鈴の元に寄る。

「うん、確かにそうだね」

鈴は返事はしたものの、何か考え方をしているようだ。

Aチームのキックオフ。

Aチームは横一列に並んでフォーメーションを作り、敵がプレスにかかるところでフリーの味方選手にパスをして好機を伺う。しかしそれを行うにはあまりにも人数が足りない。ゴールキーパーでひとり分のフィールドプレーヤーが削られるので、実質ピッチにいてボールを繋げられる選手は3人。更に、横一列で並んでいるので一人でもミスが出れば即座にゴールキーパーとの一騎打ちの場面を作られてしまう。そう言つている内にまたもやバスカットからエースストライカーの早坂千秋にボールがわたつてしまい中央をブチ抜かれる。鈴の位置からはいくら走つても千秋に追いつけるような距離ではない。千秋はキーパーの位置を落ち着いて見定め、頭上を抜く

鮮やかなループショートで本田2点目を決めた。

## 【A 0 2B】

ゴールの祝福を受ける千秋に、やはり諦観色の色濃いAチームの面々。「ああ～もうだめだ～」とか、「何点とられることやら……」などの敗色ムード濃厚な状態。

だが、鈴は違った。2点差を付けられて負けているのだが、「ふふん」と鼻を鳴らす。それを見た千秋は「それが負けている人のする表情かしら」と密かに警戒心を強めるとともに、これから鈴が何をしようと思ふと企んでいるのだうつとワクワクさせられた。

「ね、皆。ちょっと」

鈴はキックオフ前にチームメイトに何かを告げる。

「……うん、わかった」

「やるだけやってみますかあ？」

2点差もつけられているこの状況。何か策があるのなら、乗つてみるしか道はない。

Aチームのキックオフ。

ボールは鈴が中央でドリブルしながらキープすると、咄嗟に千秋のチェックが入る。鈴もそのことは先ほどまでのプレーで熟知しているので、後方の選手に渡す。

きちんとボールが渡ったことを確認した鈴は思い切り前線を中央から駆け上がった。千秋は後方にパスされたボールにチェックしに行くものの、流石にボールより速くは走れないため鈴のパスは成功する。同時にパスを受けたそのチームメイトは思い切り前線にボールを蹴り出した。

(前線へのファイード！　でも大丈夫、後ろにはちゃんと味方がカバーを……)

千秋はチームメイトのカバーに期待していた。

だがしかし、鈴へカバーに行く選手は誰一人居なかつた。

他の二人の選手はサイドに張つており、中央、つまり千秋の後ろのカバーは、誰も回つていなかつたのだ。

鈴はゴールキーパーが飛ぶ方向とは真逆の方向へボールを流し込み、1点を返した。

「――！」

過信であつた。

万能すぎる早坂千秋への過信。

これが逆に失点を喫してしまつた原因となつてしまつたのだ。

千秋が中盤を全てカバーしてくれるので、味方選手は両サイドをケアし、全方向包囲網を完成させていた。鈴はそれを逆手に取つたのだ。最初の失点で千秋はボールがサイドにわたつても動かず、中央でボールの取り合いになると果敢に参加していた。2点目も同じように中央の突破であつた。その時もサイドは千秋に連動して少し上がるだけであつた。言い換えれば、サイドは千秋のカバーかアシストでしかないとことであつたのだ。

つまり、彼女の万能さとチームメイトの過信がこの失点を生み出してしまつたということだ。

「……二人共、サイドじゃなくて、私の後ろでラインを頼むわ」

千秋の眼光もまた研ぎ澄まされる。

千秋にとつては敗北も許されないが、やはり失点も許されるものではない。自分が対処すべきところを逆手に取られて点を決められてしまつた責任も感じている。勝負事に厳しい彼女にとつてはたとえそれが『体育の授業』であつたとしても、プライドが許さない。千秋は両手で自分の顔をパシパシと軽く叩き、気合を入れ直す。

【A1 2B】

Bチームは千秋の中央突破戦法を引っ込んだ。千秋を中盤中央のバランサー的な位置に配置し、ラインを上げ下げして味方を裏に飛

び出させる。

この千秋のパスにいち早く反応した鈴は精一杯に足を伸ばし、サイドラインに逃れる。

スローインとなつたボールに相手選手が頭で合わせてゴールを狙うも、チームメイトが競り合つたので頭はボールを捕らえることなく通過したが……。

「！」

遠いサイドで千秋がフリーになつていた。

「もらつた！」

千秋は素早く右足を振りぬく。綺麗なダイレクトボレーだ。だがそこでも鈴が体を投げ出してカバーに入る。

ボールは勢いを失いゴールキーパーにキャッチされた。キーパーはボールを所定位置にセットし、思い切り駆け上がった

鈴に浮き球のフライロングパスをだす。

「そこ！」

敵選手が、ボールが落ちきる寸前に鈴にチェックをいれる。

しかし鈴は左足で敵選手の左前にボールをはたいて、自分は相手の右を走りぬき軽々と抜き去り、更に視線で味方選手にパスを出す視線を送る。

「マークついて！」

中盤まで戻つていた千秋がそれに気付いて大声で指示を出す。

しかし鈴はその声に反応し、視線を切つて自ら単独突破を切つて出た。

「いかせないよ！」

一気に加速する鈴と、それを止めるべく猪突猛進する千秋。

ドリブルする一方で、フリーランニングの全速力。鈴は追いつかれて横からプレスをかけられるが、体をすくめて左に進路を取ろうと見せかけた瞬間に右へ切り返す鈴のドリブルに翻弄されて振り切れてしまう。

「よし！… いけえー！ 鈴 ー！」

「止めてえ　　！」

互いのチームメイトの大声援。

鈴とキーパーの一対一だ。

しかし、突如鈴は進行方向へドリブルするスピードをほんの少し  
だけ緩めてしまった。

「！！」

キーパーはその一瞬のミスを逃さず、ボールを保持せんとばかり  
に飛びかかる。しかし、それは最悪の判断だった。

なぜなら鈴はミスをしたわけではなかったからだ。

鈴は一瞬だけ勢いを弱めたボールに半身だけ背を向け、左足、足  
の裏でボールを進行方向に転がしてそのまま加速し、ゴールキーパー  
を抜き去った。

ボールは無人のゴールへと吸い込まれる。

「…………嘘でしょ…………！」

マルセイユルーレットという技だ。

鈴はそれをいとも簡単にやってのけたのだ。  
これには千秋も苦笑いするしか無かった。

このゴールが決まると同時に、笛が吹かれた。  
試合は2－2の同点で引き分けとなつた。

「いやー！　楽しかった！！」

鈴はとてもご満悦なようだ。

「鈴つてサッカー上手なんだねー！　私、びっくりしちゃつた！」  
と千秋もすっかり感心している。

その鈴の劇場となつた試合を、1年の教室から授業中にもかかわらず熱い視線を送つっていた男子生徒がいた。彼は華麗な技を披露しゴールを決めた女生徒を必死に目で追う。くしゃくしゃになつた鈴の体操服から、彼女の名前がかすかに見えた。

「ゆきしろ……先輩……？」

## 意外と真剣勝負（後書き）

「」意見、「」感想などあつまつたらお気軽にどうぞ！

鈴が下駄箱で騒いでいる。

このままでは朝一からいきなり超田立つてしまう。イツキは急いで鈴を教室まで半ば強引に引きずるように連れていった。

「いきなり喚き散らすなって！ また変なヤツだと思われたいのかあ？」

「手遅れだよ」

確かにその通りだ。鈴にも自覚はあるらしい。

「それで、何を騒いでたんだ？」

「！ そう！ それ！ それだよ！ そのことなんだけど！」

鈴は一枚の手紙を右手に持っていた。

「何これ？」

「下駄箱の中に入つてた！」

下駄箱の中に入っている手紙といえば……。

「す、鈴……、まさかそれって……！」

もしさ、イツキの恐れいていた事態が起こってしまったのだろうか。

大前提として、鈴はモテるのだ。

なぜならともかく可愛いし、その上に愛嬌もあって胸もある。そんなことイツキは知っている。彼女が男子から抜群の人気を博していることも十分熟知している。だが、彼は完全にタ力をくぐっていた。「まさか、まだ1学期中だし、鈴は確かに可愛いけどやつぱり変なヤツだし！ そんなことあるわけない！ ないない！」と心の奥底ではそう信じて疑わなかつたのだ。だがその恐れていたことが現実のモノになりそうな今、イツキは焦りで世界がぐるぐる渦巻くような感覚に見舞われる。

「ラブレー」

「不幸の手紙だ

「なんでだよッ！！」

鈴は嘆きながら机に突つ伏す。

「なんでここまで来て不幸の手紙になるんだよ！？　ていうか古いな！　不幸の手紙で！　古いな！！」

鈴は一昔前のドラマも再放送で見てています。

「だつてだつて！　不幸の手紙しか有り得ないじゃん！　私は不幸になっちゃうんだー！　わーん！！」

「鈴の『下駄箱の手紙』のイメージって、それしかないのか？」と思つたが、そんなことを尋ねるよりももっと重要なことがイツキにはあつた。

「鈴、中身読んでみるよ」

小声で鈴に伝える。大きな声だと騒ぎになる可能性があるので、イツキは鈴の耳に手を当てこそ話をするように話した。

「いやだ！　人の不幸の手紙を見たがるなんて、イツキはとんでもないへンタイだよ！」

「いや、ゼツツッタイ違つから、読んでみるつて」

鈴は全く乗り気じゃないようだ。

「そんなのわかんないじやん！　これで本当に不幸の手紙だつたらイツキに5通りくらい送りつけてやるんだから！」

想像してみると、とんでもなく鬱陶しい仕打ちである。

イツキはそれでも「大丈夫だから」と無理やりひつべがして、鈴の机の上にぱつと広げる。

『拝啓、雪城先輩。

是非先輩にお話したいことがあります。

今日の放課後、校門の桜の木の下で待っています。

よひしへお願ひします。

1年3組 杉崎友一』

『の手紙はイツキの言つソレであるようだつた。

「……新手の不幸の手紙だね」

「まだ言うかッ！？ どう見ても違うだろ！？」

確かにこれはどう見ても「不幸の手紙」には見えない。しかしある種イツキにとつては完全に不幸の手紙だつた。人気のある鈴を放置していたツケがこんな風に回つてくるなど、イツキは想像だにしなかつた。いつも側にいてくれる鈴がいつの間にか自分だけのものになつてゐるかのような、そんな自分勝手な思いが芽生えていたのかもしがれない。何にせよこれは包囲網を張つていなかつたイツキのミスだ。手紙の差出人『杉崎友一』には何の罪もない。だから彼が今その手紙を真つ二つに粉碎しようとしているのはとんだお門違いといふものだ。

「あー ダメ！」

鈴はイツキがその手紙を処刑しようとしているのを悟つたのか、さつと取り上げてしまつた。

「不幸の手紙は、破つたり捨てたりしたらその人に全ての不幸が

」

「ああああそだな鈴、そいつは今俺を不幸にしやがつたんでもない手紙だつたぜ……」

田に生氣のない表情に体をゆらゆらと揺らしながら頃垂れ、どこからそんな声が出るのだと言わんばかりの低い声で誰にもぶつけられない憤りを噛み殺すイツキ。

「……イツキ、なんか怖いんだけど」

因みに鈴がイツキに突つ込んだのはこれが初めてだつたりする。

「……本当にに行くのか？」

イツキは金魚の糞のよじに鈴について行く。

いつもとは逆の光景だ。

「そりゃ行くよ。だつてコレ、不幸の手紙じゃないんでしょ？ 違うんだつたら、私に用事があるんだから、ちやんと聞いてあげないと」

「違うけど、俺を不幸にはしたな

ボソッと呟くイツキの声は鈴に聞こえなかつたのか、鈴はチラと視線を合わせただけでハテナマークを浮かべるような表情をするだけだつた。いつもは可愛く思つたその顔も、『誰かのものになつてしまふかもしれない』と思つと、やりきれない思いが脳内をぐるぐると去来するのも無理はない。

「はあ」と深くため息だつてついてしまう。

「あ、あの人かな？」

花も散り、緑色の葉を青々と茂らせる桜の下で、その男子生徒はひとり佇んでいた。

背は高校男子にしては小さく、おそらく一六〇あるかないかほどだろう。

「……！」

だがしかし、一人がこのように瞬息を飲んだのはほのせいでない。

「あ、ゆきしろ先輩ですか？」

一人に気付か、舌葉を一つ一つ寧て紡ぎだすよつてゆづくつと話す。

「えと……あれ……？」

『桜の木の下に来い』と書かれて、その通りに来たら彼がいた。ならば田の前にいるこの人物は間違いなく『杉崎友一』であるはずだ。いつもなら「早く行けよ」という主旨の指摘がイツキから飛びはずなのであるが、その肝心のイツキさえも鈴と同じ心境になってしまっていた。

「……どうかしましたか？」

そのおつとりとした端正な顔立ちは確実に女子のように見える。しかもかなりグレードの高いほうだ。更に声までも男か女か分からぬような絶妙の高さ。しかし来ている制服はイツキと同じ男子用の制服。

困惑せざるを得なかつた。

「あ、あのせ、もしかして、君が　」

「あ、はい。申し遅れました。私は一年3組の杉崎友一という者です。よろしくお願ひします」

一人は度肝を抜かれた。

俗に言つ『美しすぎる』といつやつであろうか。

はたまた男の娘といつやつであるうか。

彼らの田の前にいる杉崎友一は、女子のよつな容姿の男子であつたのだ。

杉崎友一（後書き）

「意見、『感想などあつましたらお気軽におひつぞー！』

度肝を抜かれて、ただ立ち尽くす雪城鈴と神村イツキ。

鈴の表情からも伺えるように、記憶喪失であろうと目の前の現実には疑問符を投じるべき事実だということは理解できたのだろう。概念が取り扱われた鈴でさえ驚きの表情を見せてしまうこの光景は、一般人のイツキにはもっとダメージが大きいものだった。全く関係のない話だが、「何故同じ人間なのにここまで差がある……！」などということを考えさせられるほどだった。驚き顔を晒しながら固まってしまっている一人に、首をかしげて疑問符を投げかける杉崎友一。「どうしたのですか？」

物腰柔らかな語調。

言葉を一文字ずつ丁寧に発音する話し方は、まるでクラスの大人しい女の子のようだ。

「えと、君が杉崎友一『くん』だよね？」

鈴は「くん」なのか「さん」なのか迷ってしまうが、「友一」という名前を信じて「くん」の判断をする。保険として間違いのないようにわざわざ「くん」を強調した。その前に男子用の制服を着ているので迷うはずはないのだが、それでも確信が持てなかつたのだ。「はい、私が杉崎友一です。本日は私のためにわざわざ時間を割いてくださって、有難うございます。私のことは「友一」とお呼びください」

友一はぺこりと礼儀正しく頭を下げる。小さい背丈が余計に小さく見える。

「あの、突然不躾で申し訳ないのですが、そちらの方は……？」  
右手の掌を上にし、イツキの方を指す友一。

「あ、え、俺はその

「イツキだよ。神村イツキ」

急に振られて焦るイツキを鈴がカバーする。

「神村イツキさん……ですか……？」

友一に困惑の表情をされるイツキ。確かにこんな男女の色恋沙汰に知らない男がひとりの「こと」と付いてこられるのは戸惑つてしまつだらう。イツキは少し申し訳なく思うも、しかしそんなことを言つてすゞす」と引き下がつていいような場面ではない。だが、ここに来たからといってイツキに何か言う権利があるのだろうか。

「そう、イツキ」

「イツキさんですか。初めまして、杉崎友一と申します。今後とも宜しくお願ひいたします。私のことは「友一」とお呼びください」相変わらずとても礼儀正しい杉崎友一。イツキも思わず同じように敬語で「よろしくお願ひします」と返してしまつ。

「かみむら先輩は、ゆきしろ先輩の彼氏なのですか？」

唐突且つドストレートな質問にイツキは思いつ切り吹き出す。そして見ていられないほどに取り乱す。いつもなら状況は違えど鈴がこうなるパターンが多いのであるが、今回は全てが真逆だ。

「どっちだと思つ？」

鈴はその問いに「ふふつ」と微笑みかけながら友一に返す。友一はぽけっとしたまま、「どっちでしょ」うと考へるような素振りを見せる。イツキは上手い返しだなと、正直感心してしまつた。

「それで、友一は私に何の用があるのかな？」

この流れでいきなり本題に探りを入れる鈴。彼氏がいるかいないか分からぬまま、友一は用件を言わざるを得なくなつてしまつた。イツキはハラハラしながらその返事を待つ。

「はい。单刀直入に申しますと、私は」

イツキは手に汗を握りながら「来るぞッ！」と腹をくくり、ギュッと強く目を瞑る。

「私はゆきしろ先輩にサッカーを教えて欲しいのです」

イツキは拍子抜けをしてしまった。

本当に体勢が崩れそうになつたので、ひとりで踏ん張つて持ちこたえる。

「サッカー……？ 私がサッカーを教えるの？」

「はい。そうです。この前のサッカーの授業で、ゆきしろ先輩の華麗な技の数々を陰ながら拝見しました。私はサッカー部に所属しているのですが、どうしても上手くなりたいのです。どうか協力してもらえませんか？」

意外と切実な願いだった。イツキはとんでもない方向に勘違いしてしまつていたのだ。とりこし苦労で振り回されていたと思うと、一気に疲れが出てきたよつた気がした。

「いいよ」

鈴はひとつ返事で了承する。

「でも、私はただ自分ができるだけで、そんな人に教えられるような技量なんて無いよ？ それにサッカー部なら私より上手な人もたくさんいるし、そつちに教えてもらひほひが手つ取り早いんじやないの？」

鈴にしては大正論だ。イツキもこれには何の突つ込みどころの余地が無い。鈴の真当な質問に、友一はどこか答へづらそうな表情だ。だが、さつと顔を上げてその訳を話し始める。

「私はもつと上手くならないと、サッカー部を辞めないといけなくなつてしまふのです」

衝撃的な発言だった。上達しないと辞めないと云つて、あまりにも厳しそうのではなまかプロの世界じゃあるまいし。あまりにも厳しそうのではなまか。

「……私は下手なのに、一年生なのに、スタメン（スター・ティングメンバー）。先発選手のこと）で試合に出されるのです。私自身も自分が試合に出るたびに足を引っ張つてるのはわかるほど、下手なのです。チームメイトたちも、私が下手なのにも関わらず試合に出

されているので、きっと疎ましく思つてゐるでしょう。そんな状況を見かねたのか、私の姉が『試合で活躍できないのだからお荷物になるだけで無様だから、辞めなさい』と……

友一はいつの間にかまた下を向いてしまつていた。悔しさで声も震えているような気もした。

「……『下手なんだつたら迷惑になるから辞めひつてか……。キツにことを言うお姉さんだな……』

「いえ！ 決してそのようなことを言つてはいるのではないのです！ 姉はきっと、私のことを思つて、このようなことを言つているのです！ もともと陸上しかやつていなかつた私を、『サッカーなら陸上の経験も生きる』と言つてねじ込んでくれたのも姉なのです！ 引っ込み思案の私を前へ前へ引っ張つていつてくれたのはいつも姉でした。私はこんな形でサッカー部を辞めたくありません！ 姉の期待に……少しでも応えたいんです……！」

最後はふり絞るような声で言葉を吐き出していた。友一の手は固く握られ、血色が変わつてしまつていて。

「……事情は分かつたよ、友一」

鈴が友一に近寄り、優しく話しかける。

「……！」

友一は泣きそうになつてゐる顔を上げた。

「でもその前に、友一のお姉さんと話がしたい。お姉さんはいつも、どこにいるの？」

鈴の顔は真剣だった。

「生徒会室です」

「生徒会室？」

イツキと鈴の二人には實に縁のない場所だ。

「はい。私の姉は杉崎優香。生徒会長です」

杉崎優香（後書き）

「意見、『感想などあつましたらお気軽におひつね！』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0603x/>

---

だから彼女はついてくる！

2011年10月10日03時18分発行